

学校生活のこと

昭和29年（緊縮政策で高度成長への基礎固め）

新学校制度による義務教育の延長

六・三制によって義務教育が三年間延長された。それまでは大部分の者は、小学校六年間の義務教育を終えたとき、また、その後二年間の高等小学校へ進んでも、これが上級学校への進路がない袋小路であったから二年後には、たとえ向学心があつても社会へ出ていくものと決まっていた。それが新しい制度では中学卒業後の上級学校への道が誰にでも開けていたから、あきらめていた上級学校への進学に手が届くようになった子どもたちも大ぜいいた。戦後の悪条件のなかで新制中学がすんなり定着普及したのは、国民の要望と次世代の教育が最重要だと考えた地域の大人たちの熱意を抜きにしては考えられない。

「戦後少しの間、中学生がどんなに学校を喜んでたか。わ」（朝日新聞「大村はまの世界」新制中学50年 平成9年3月24日）。

昔は中学に進む人は少なかつた。あこがれだったのよ。

あんな小躍りしてくる生徒をみんな忘れちゃったんだ

しかし一方では、わが子の小学校卒業を心待ちにしていた家庭もあつたし、従来はそれが普通であつたから、新制中学へ行かずに一家の働き手としての生活に入った者もないわけではなかつた。今となつてみると長期欠席（略して「長欠」）生徒の多くがそれに当たつていたのではないかろうか。どのクラスにも学籍簿には載つているが全く通学して来ない生徒が二、三人いた。授業のたびに出席簿の名前が読まるのでみんなも姓名だけは知つていたが実体は不明のままで卒業したクラスメートである。学校側も家庭訪問などで通学を要請したりの努力はしていたようだが、簡単に解決できない難しい問題

II 昭和二十年代

原水爆禁止運動始まる
3月ビキニ環礁で米が原爆実験。第五福竜丸「死の灰」被害判明、8月に原水爆禁止署名運動全国協議会結成
陸海空三軍の自衛隊発足

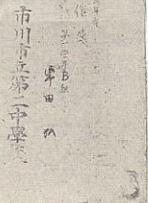
☆三種の神器（電気洗濯機・冷蔵庫・テレビ）と呼ばれる耐久消費財が急速に普及。テレビの受信台数4万台

☆プロレス、力道山とシャープ兄弟の対戦、街頭テレビで大人気

市川市立第一中学校

市川の教育地盤の特殊性と上級学校への進学

題であった。戦後の混乱期の学制改革ではいつても、本人の意思にかかわらず義務教育を受けられなかつた人もあつたことを忘れてはならないと思う。



進路状況	
田中四年生	三〇〇
二年生	一八三
四年生	六一〇
五年生	三三七
六年生	二九八
七年生	二二一
八年生	一七九
九年生	一六九
十年生	一六九
十一年生	一六九
十二年生	一六九
十三年生	一六九
四年生	一六九
五年生	一六九
六年生	一六九
七年生	一六九
八年生	一六九
九年生	一六九
十年生	一六九
十一年生	一六九
十二年生	一六九
十三年生	一六九

旧学校制度下では、県内の受け皿が小さかつたこともあるが上級学校進学といえば、おもに都内の中学校や女学校への進学を指していた。新学制になつても兄、姉が通学していた都立高校を希望する者が多くあり、都立高校の側でも市川周辺からの通学生の受け入れで自校生徒の質の底上げができることから、受験期になつてからの寄留による都立高校への越境受験が黙認されていた。しばらくは都立高校と県立高校と両方の受験が可能で、それが普通であったが、学校によつては建て前上入学当初は市川までの通学定期券の証明書をもらはず、切符を買って通わなくてはならないこともあつた。その後、年々越境入学を前提とした寄留を認めなくなつて、八期生（三十二年卒）では本当に住んでいるか否かを寄留先まで調べに来るようになつたので、どうしても都立へ行きたい場合は中一から母子で寄留しておく方法がとられたりした。この頃には、県立高校が充実してきたこともあって、都立高校一辺倒の風潮はだんだんに薄れていつた。

なお、都立高校には普通科のほかに職業科に伝統のある専門高校があつた。三商、都立化工などは

市川方面からの進学者の多い学校であった。また、都立以外にも技術を身につける専門学校に進むこともあった。そのほか、昼間は働いて、夜間高校へ進んで夜勉強した人もある。

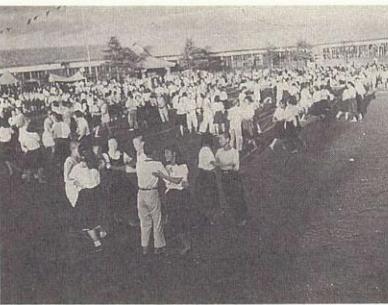
中学時代を振り返って

私は終戦を小学校三年で迎え、昭和二十四年が中学一年だったのですから、まだ世の中は混沌とした時代で、駅前にはヤミ市と言ったテント張りの店があつて、お金も物もない、今の人には想像もつかない時代でした。

でも本当に楽しい中学時代でした。お昼休みでしたか、長い縄跳びで大波をまわして、何十人も跳んで行くのです。一番先頭の人が行く先を決めて遠くの木を回ってきたりして、最後の人が跳びおわるまでに一日散に帰つて来るのでした。本当によく遊びました。夕方も夕陽が真っ赤に沈むまで遊んでいたように思います。

また、在原先生が運動会、学芸会に出すダンスを一所懸命に教えて下さいました。「乙女の祈り」「ハンガリー舞曲」「オリエンタルダンス」「美しき碧きドナウ」……。今でもこれらの曲を聞くと懐かしさでいっぱいになります。

そして私は在原先生の旦那様の佐藤先生に小学五年を受けて頂きました。進路の事についても親身に相談に乗つて下さり、父が戦死をしていましたので、我が家家の経済状態も分かっていて下さり、中学は公立で、高校の費用を出してくれるよう母に話しに来て下さいました。が、先生の想像より我が家家の貧困は上



フォークダンス（昭和26年）



馬跳び（昭和25年）

回りまして、中学が終わる頃には、父が勤めていた処へ母が勤めておりましたから私がその後に入る事になりました（また、兄がおりましたのでなんとか男の子だけは教育しなければと母は考えたと思います）。でも、私は中学を出ていきなり大人の世界に入るのには抵抗がありました。

お勉強にはその頃力が入つておりませんでしたが、同じ年代の人がいない世間がいやでした。そして良い方法はと思っていたとき、どなたに伺ったのか今は記憶がないのですが、高校に二部（夜間部）と言う制度があると聞き受験をすることが出来ました。入学すると、私と同じような境遇の方が殆どでしたから、本当に入つてよかったです。ただ学校へ行くのが夜になつただけで楽しい学校生活でした。授業が終わつた後も、部活もして私などはその為に学校へ行つていた節があります。

今は夜間部も廃校になる学校が増えていくようですが、その頃は本当に必要な処でした。男子などは高校を夜間部で居間は大学のための学費を稼いでいた方もいました。

今の学生には想像もつかない事だと思います。自分で働いて学費を出すなんて本当に地に足が着いていいであります。が、一生にはよい社会勉強です。

の場であり憩いの場でもありました。いえ、今になると楽しいことばかり思い出しますが、その頃は私はこれからどうなるのか小さな胸を痛めています。そして文集『玉藻』にその不安を書いたたない文を、今まで記憶していく下さった友があつたのを知つて感激

しています。

東京都に隣接する市川の地理的条件から、小学校から中学校へ進学する児童の三・四割が、私立中学校や越境して都内の公立中学へ進学してしまつ中で、地元新制中学に進学した生徒の六、七割が進学希望で、父母たちはPTA活動の面から学校経営をバックアップする一方で高校受験指導を要望して文集『玉藻』にその不安を書いたたない文を、今まで記憶していく下さった友があつたのを知つて感激

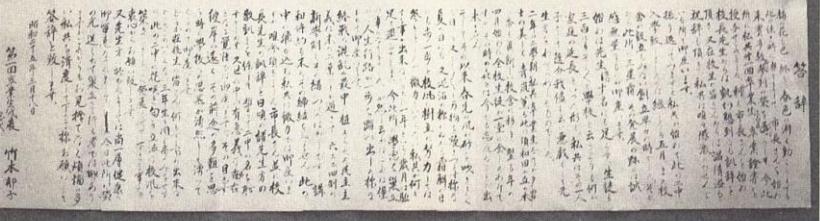
しています。

経済的な事だけでなくもつと人間関係でも複雑な事情があり乙女心はすたすたでした。でも学校がとても楽しかつたので教わされました。本当に懐かしい思い出です。

（三期 坪田美佐子 現岩本）

成績といえ、一期生の頃学期末試験の成績を一番から五十番まで墨書きして真間小二階の廊下に張り出した。五十番以降の順位も決まっていて、次年度のクラス分けの際この順番をもとにクラスの成績が偏らないように生徒を振り分けました。また、二十四年度入学の三期生の場合、入学前の三月頃に二中校舎で学力試験があつた。クラス分けのために成績順を決めたものと思われる。真間小と国分小の両校から新入生を迎えるのが初めてであつたからであろう。この年の一年生と二年生には各一クラスの補助学級を編成し、三年生は進学組四クラスと就職組三クラスに編成した。補助学級の編成は二十四年度の一年間だけで翌年度からは少人数の特殊学級だけになつた。この経緯については鹿倉先生の「特殊学級経営記録」に詳しい。

補習といって唯一思い出すのは一年生のときの草深先生の文法の補習のことである。それは、先生が毎週、現代短歌を黒板に二十首くらいお書きになるのをノートに書き取つて、一人が一首ずつ品詞分解をしていく



竹本静子

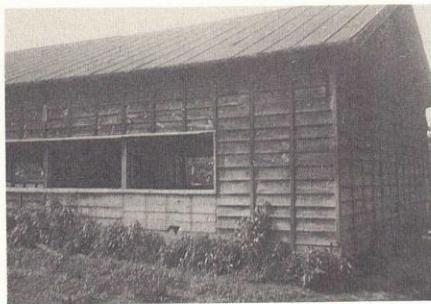
というものであつた。「ことば」の理路整然とした仕組みがおもしろくて一週間が待ち遠しかつた。短歌のおもしろさや日本語の語彙の豊富さに気付いたのも、九条武子、与謝野晶子、斎藤茂吉、尾上柴舟そのほか沢



兵舎校舎の前で



兵舎校舎の前で



兵舎

昭和二十三年九月一日に四教室の新校舎が完成し、二年生四クラスだけが真間小教室からの引越しをした。全生徒が須和田へ移ったのは、やつと三つの学年に生徒が揃い五中と合併して規模が大きくなつた翌二十四年四月一日である。この時は新校舎に入った三クラス以外は三年生も旧陸軍の建物を利用した兵舎教室に入つたが、五月十五日に遅れていた二期工事の七教室が完成し三年生の全部が新校舎に移つた。一年二年は兵舎教室のままであった。

校門も垣根も堀もなく、その頃二中の敷地は須和田の丘全部という認識であった。起伏のある広い敷地を囲むように配置された掘立て式の旧兵舎は土塁や灌木に囲まれていた。忠靈塔は扉もなく空っぽで出入り自由、校舎の近くまでソバ畑やネギ畑があつたり、創立当初の真間口の通学路は崖をよじ上るような階段状であつたりした。

校舎も設備も貧しかつたけれど、精神的な学校生活は希望に溢れた自由活発なものであった。広い校庭での雪合戦、忠靈塔での隠れん坊、馬跳び、縄跳びなど道具がなくても遊びには事欠かなかつた。進学塾もまだなく受験勉強もそれほどではなかつたから毎日暗くなるまで遊んだ。自分たちの学校を

自分たちで創るのだという意気込みが学校全体に満ちていたから、また戦後の復興を目指す世相でもあつたから、教室の雨漏りも割れたままのガラス窓も我慢できだし校地の整備作業も苦労とは思わなかつた。

中学校では教科ごとに教師が違うので、授業時間の替わり目には職員室から教室へと広い校地を横切る先生方の姿が見られた。特別教室はまだ音楽室と図工室くらいしかないので生徒の方の移動はあまり必要なく、移動するのもつばら先生がたであった。

旧兵舎のいくつかの建物には一番端に三層ほどの小部屋が付いている棟があつた。これは下士官部屋といわれていたが、上がり框に統いて畳が二枚入つてゐるので一人位なら何とか生活できた。この下士官部屋が校内に全部で十部屋くらいあつて、男の先生が住んでいた。そこに住んだ経験のある先生は十人は下らないであろう。校舎不足どころか当時は住宅さえが極端に不足していたから、この下士官部屋も空けておく手はなかつた。下士官部屋に住んだ経験のある先生方のお名前を失礼ながら挙げてみよう。田村先生、千葉先生、深山先生、藤沢先生、小高先生、中村宗司先生、寺島先生、鹿倉先生、渡辺先生の諸先生方である。

「二中新聞」12号（昭和26年5月21日）は入学したての一年生に入学の感想を聞いている。やはり校舎や施設の改善を希望する声が多い。「ガラスを入れてほしい、黒板や床の穴をふさいでほしい、天井をふさいでほしい、便所があまりにも不衛生だ、水道が少ないのでなんとかしてほしい」などとあり、発足期の新制中学校の施設がいかに貧弱であったか推測できよう。同じ日の紙面に、校門坂の「二中昇仙峠」ともよばれているとある。また風の日には校庭に砂土の渦巻きが出来て教室に積もるほど舞い込んだもある。関東ローム層の赤土は雨でも風でも困りものであった。

新しく建つた校舎も今から考えると粗末な物であったから、完成後日も浅いのに床が落ちたり、はめ板が外れたりした。兵舎校舎の方は一応頑丈にはできていたが、軍靴を履いたままの生活に合わせ

山の歌人のエピソードに触れて自分が大人の仲間入りをしたような気がしたのも、この補習のこと。今の養護学校の敷地にあつた兵舎の教室、謡をうなりながら窓の外を眺めてらした学生服姿の先生など昨日のことのように瞼に浮かぶ。でも、その他の学科の補習については補習があつたのかどうかの記憶さえない。

（三期）
補習はもつばら先生のガリ版刷り教材で行われて、

もう一年早かつた。

（七期）

それが懐しい。数学の松田先生は中一から中三までの重要なところをガリ版で刷つて教えて下さった。都立高校受験は無理と先生からいわれた。入試に英語が加わった上、都立と県立の入試日が重なつたため、三年生最後の発表の成績で百番以下の人には都立順位のかなりの人数が国府台高校へ進んだ。飛び抜けて出来る人も行った。県立入試に英語が入ったのはもう一年早かつた。



木造東校舎（昭和26年）

て作つてあるから床板は荒削りなうえ床は隙間だらけであった。下駄履き通学の時代で上靴などもろん持つていなかつたから教室内は裸足で過ごしていただろうか。ある五期生は、自分が会計係をしていた時に、転がつた硬貨が床下へ落ちてしまつて途方にくれた思い出を持つという。当時の貨幣価値ではコイン一つでも大問題であつたろう。

大きな兵舎を壁で仕切つて背中あわせの教室にしたところもあつた。この仕切り壁は天井に近い鴨居から上の部分を塞いでなかつたため授業中も隣の教室の先生の声が筒抜けであつた。先の新入生の意見の「天井をふさいで」というのはこれを指しているのではないだろうか。

なつかしい兵舎中学

母校の二中を思う時、「二中の山」という土地表現があつたように、立ち木や藪に囲まれた丘、そつくりが浮かんでくる。勝手にも、平地の学校はつまらないだろうなど、考えてしまう。

霜柱の立つ季節、靴の底に泥をつけながら急勾配をあがっていく。足元だけの視野が急にひろがり校舎が見えた。当時、校庭を開んで、教室が棟ごとに独立していたと思う。学校、教室とくれば、長い廊下がイメージされるが、一、二年の頃の廊下の記憶が欠落している。各教室の土間は軍靴でふみ固められ、広く感じは

（以下略）

（三期 湯浅久子 現仁本）

したがうす暗かつた。西側の高みに忠霊塔とよばれた建造物があり、近辺の草むらは格好の遊び場だった。音楽室は高床式の一戸建て、トイレも校庭を横切つて行った。冬期は寒かつたろう。教室の羽目板を、男子が剥がしてストーブにくべてしまつたことがある。机の上に立つて八艘とびよろしく各人の机を跳ね渡つたちゃ年頃だった。運動場はそのエネルギーを発散させることに、充分なスペースだったと思う。時にヤスリのような弾片を拾つた。

昭和二十六年ころ校門は真間口の坂の下にあり、校舎までの長い校門坂にはもちろん街灯もなく、はげ山の名残りの赤土がむぎだしのままの、道路といよりはむしろスキー場のゲレンデのような広い坂であった。この坂は雨が降ると赤土が流されてひと雨ごとに地形が変わる。雨の一日に理科で習う浸食作用の何百年分を時間短縮で見ることができた。雨水を含んだ赤土は始末が悪い。雨に限らず、

冬の晴れた日も霜解けのぬかるみであつた。電車通学の生徒は晴れた日の泥まみれの雨靴を市川駅の水道で洗つて帰つたという。一般的な生徒で雨靴を持っている者は稀で、大抵は下駄ばかりであった。

下駄ばき通学の当時では、体育の時間や外で遊ぶ時などには裸足があつたから体育の授業が終わると、昇降口の足洗い場で足を洗つて教室へ入つた。

PTAの役員会が雨の日と重なつた折に、この校門坂のぬかるみに足を取られた参加者たちから、校門坂を何とかしようという声があがつて市に整備してくれるように要望したことが学校新聞の記事になつてゐる。その後、実際に校門坂の整備をしたのは教職員、父母、生徒などの学校関係者であった。

昭和二十四年九月二十一日に市内中学校競技会が二中で開催されることになった。これは日頃から悩まされてきた運動場の凹凸を解消するよい機会であつた。思い切つて運動場の拡張作業を行つた。もともと、校地は西の忠霊塔側から東へ向かつて全体としてなだらかに下る斜面になつていた。そこを平らにして運動場を拡げるという計画であった。全ての作業を全校の職員と生徒だけで行つわけだから、なかなかの重労働で

あった。西の高い方の斜面を崩した土を東の低い方へ移すのである。「生徒は家から荷車、リヤカー、スクープなどを持参した」という。全員二交替あるいは三交替制で作業をした。一年生も女生徒も参加して一時に四百人が運動場狭いと荷車、リヤカー、バケツ、戸板、もっこ、急造の担架などで土を運んだ。「一年生が小さな体で大きな荷車を曳いて喜々としてかけ廻つている格好は桃太郎の鬼ヶ島征伐を髣髴させられる」と、学校新聞にある。この作業で忠霊塔側より一段低い水準の、広く平らな運動場ができあがつた。

この後も校庭の小石拾いはしばらく続いていた。毎朝の朝礼の後に全校生が校庭の端に一列に並んで目の前的小石を拾いながら反対側の端まで歩くというものであった。小石拾いは裸足で走り回る当時としては重要な作業であつたろう。

体育祭・バザー

発足間もない新制中学を地域住民に認識してもらうのに体育祭は絶好のチャンスであつたし、同時に開催するバザーは住民の足を学校へ向けさせずにおかなかつた。バザーは、財源の乏しかつた當時



校内新聞号外

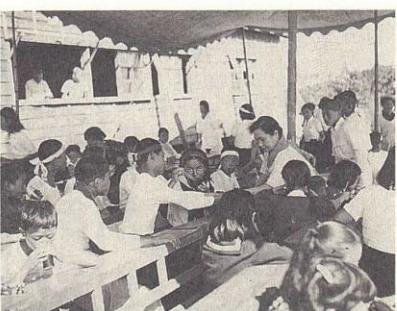
学校運営をPTAの立場からバックアップすることが最大の目的であったが、食糧も物資も不足していた時代のバザーは今考えるよりずっと魅力に溢れていた。体育祭もバザーも市川二中の最大イベントであったから、学校もPTAも生徒もこれを目標に苦労して準備し、そして楽しんだ。

第一回体育祭は昭和二十三年十月十七日に須和田が丘で行われた。前年度は一年生だけの間借り時代で运动会も真間小と合同開催であったから、二中としては、新校舎落成を盛大に祝って展覧会も同時開催したこれが第一回になる。

体育祭はABCDの四組の対抗戦であった。走り高飛び、砲丸投げ、千五百メートルなど正統派種目に混ざって、パン喰い競走、いも喰い競走、食い物競走など食糧難のご時世を反映した演し物もあった。真間小学校の招待演技のほか市内の小学校・中学校の招待リレーや来賓のスパンレースも組まれているなど、格調の高いものであった。また、仮装行列も毎年行われた。

同時に新校舎では全生徒の作品の展覧会があった。習字、図画、工作、手芸その他の作品がたくさん発表された。これは新校舎のお披露目をも兼ねていた。

競技やダンスの練習に余念のない生徒たちとはべつに、PTAのバザー担当者は早くから準備にとりかかっていた。バザーの売り上げ金は財源の乏しかった当時の学校運営に大いに役立った。運動用具、理科室の備品、ミシン、ピアノ、図書、拡声機、校舎の修理費、先生方の待遇改善など行政の予算がない分を何とか補おうと、全校生の父母が協力していった。食料や物の手に入りにくい時代のバザーは今考えるよりずっと利益も大きかった。



運動会・バザー（昭和26年）

バザーを成功させようというPTAの熱意は大変なものであつた。夜、真っ暗な校門坂を登つて役員会に集まつたといふ。綿密な準備をして当日を迎えた。食品部は校庭のテントで食堂を開き、紅茶、カルビス、おしごことなどを十円均一で提供した。一方新校舎内で生徒の制作品を中心に委託品を加えて日用雑貨・学用品の売店が開かれた。ほご紙で作った封筒、頭の重いはたき、縫い目の曲がつたよだれかけ等も並んでいた。顕微鏡は一度も使われないうちにそつくり盗難にあつた。

昭和二十四（一九四九）年十月十六日 第二回体育祭・バザーを行つた。

体育祭は本校の年中行事にて最大の行事であり、PTAは特にバザーの部を担当して一ヶ月も前から準備にとりかかつた。その純益六万数千円で学校放送設備

た（学内新聞）という。どれも物不足の当時にはなかなか手に入らない物であったので多くの人に喜ばれ、大成功であった。この日の食品部の売上金三万二千六百円はピアノ購入資金の一部となつた。一方で、ピアノを探すことも一仕事であった。年末に西谷PTA会長の知人からやっと手に入れることができた。校内新聞によると「今時その価格も十数万円といわれているが六万五千円で購入することができた」とある。



運動会 仮装行列（昭和26年）

「社会」あたらしい憲法のはなし

PTAは、新校舎落成と同時に備品の整備に万全を期したいと、資金調達のために学区内の家庭に呼び掛けて寄付金を募ることとした。これには、新制中学の性格と使命を学区内の住民に認識してもらいたいという願いを込めていた。予算是家庭科備品、図書費、理科備品で約五十万円。この募金の結果、三十七万五千円が集まり、設備の充実をはかるのに大いに寄与した。昭和二十四年九月三十一日発行の「学校新聞」四号に「体育施設、各教科の備品についても発足三年めにして、早くも充実の段階にのりつけるに至りました」とある。しかし、やっと揃った備品がそつくり盗まれてしまうこともあった。顕微鏡は一度も使われないうちにそつくり盗難にあつた。

学科

文部省



六・三制とほぼ同時に誕生した憲法についての授業は二十二年一学期から高山校長と能勢教頭が行つた。その年の八月に発行された『あたらしい憲法のはなし』という社会科の教科書（B6判54ページ）はイラストが斬新な印象がある。憲法の男女平等、戦争放棄、国際平和主義などについては永野作楽、浜田龍一、小高尚夫先生が「二中校内新聞」の一、二、三号に論説や論文を載せている。

「職業」 女子は家庭科 男子は珠算

二十二年一学期から始まつた女子の「職業」は運針と和裁中心の家庭科で、金子先生は教材に苦労されたといふ。衣料切符制で布地は入手困難。そこで一期女子は「ゆかた」と「あわせ」を制作した。五期生も「ゆかた」を縫つてゐる。運針競争は年中行事であつた。一期生初めての調理実習は家庭科調理室に教材が整つた三年の卒業間近で「五目寿司」を作り、高山校長も喜んで試食された。

男子「職業」は珠算だけが記憶されている。（一期）

学芸会

演劇づいた一期生 — 舞台は真間小講堂 —

最初は昭和二十三年五月の創立一周年と新入生歓迎を兼ねた学芸会である。シェークスピア原作・飯盛先生脚色・小高先生演出の「ベニスの商人」と橋本先生作・演出の「邂逅」（現代劇）の二本を上演。開校以来の催しは大入りであつた。「ベニスの商人」出演者の写真が残つてゐる。指導には二十代前半の青年教師陣が情熱を傾け、本番前夜は寝ずの番であった。前日は講堂の床いつ



II 昭和二十年代



ベニスの商人

ぱいに新聞紙で裏打ちした大きな模造紙を広げ、生徒が見守るなか美術の桜井先生が泥絵の具で舞台の背景を次々に描き上げ、文字は書道の吉岡先生が筆を振るわれた。予行演習は夜遅くまで行われ、当時、真間小校門脇の旧幼稚園の小部屋を下宿がわりにしていた先生を囲んで高歌放吟したといふ。

二回目は須和田校舎へ二年生だけが移つた二十三年度後半、クラス対抗で「劇」などを上演。「アリババと40人の盗賊」で二年B組が優勝した。これは市内小中学校合同の演劇祭に二中代表として再演。昭和女学院会場へ真間川沿いに舞台装置を持って行つた。

三回目は二十四年度、三年生合同で「レ・ミゼラブル」を上演。生徒が脚本を作り、小高先生が監督。舞台装置は図工部が協力した。

四回目は卒業後の二十六年八月、第一回同窓会総会の出し物に、チエホフの「結婚申し込み」を一期生有志で上演。いずれも真間小講堂の舞台と関係者のご配慮があつたればこそその演劇であつた。

修学旅行 遠足 見学

昭和二十二年秋、初めての遠足で一期生は高尾山へ行つてゐる。その後も江ノ島、鷹取山など日帰りである。二十四年十月一期生の修学旅行は箱根一泊で、同日にあつた遠足で二期生は車中泊の日光行、三期生は夜行日帰りの昇仙峡であった。日光組は郵便車に乗せられたり、昇仙峡組は甲府駅から

歩かされて、昇仙峡口から先の景観を見に行く元気の残っていた者は少数であった。三期生三年春の城ヶ島・油壺行で竹芝桟橋から往復の客船で他校を引率する大和久先生（三月転出）と乗り合わせてびっくりした。一期生の修学旅行は修善寺・三津浜、三期生は日光、ここまでは一泊一日、二泊三日になつたのは四期生の松島からである。食糧特に米の統制は厳しかつたから修学旅行は各自で米を持参した。二泊になつたのは食糧事情の好転にも関係ありそうだ。

昭和二十四年春、全校で横浜貿易博覧会の見学があった。初めてテレビという物を見たり、音センサーが「開けゴマ」の声に感じて宝の洞窟を開くという仕掛けで驚いたりした。会場は大変な混雑であつた。この他にも、稻毛、黒砂海岸への海水浴や潮干狩り、映画鑑賞などの校外学習がいろいろあつた。

取 締 料	範 囲 地 理 費 其 他	御 食 用	記
市川 小田原	電車料	100.00	
小田原 駿羅	旅費	50.00	
瑞穂公園	旅費	20.00	
大涌谷	火口探視料	5.00	
御殿石	石料費	50.00	
旅館	3食付便急行料	400.00	
上野駅	小浦駅 貨物料	20.00	
小涌谷	小田原 箱山電車	30.00	
前原神社	御殿石 料	10.00	
温泉旅館	旅費	25.00	
		780.00	

五期生は二十六年秋、石川島造船所の見学があつた。また、二十九年三月には、卒業を前にして横浜、東京にバス旅行をし、国会議事堂などを見学した。

日 光

—(C) 小関智恵子

修学旅行と赤痢事件

「おりるよー」という甲高い声に眠りかけていた私はとび起きた。暗い宇都宮のホームには夜霧が立ちこめて、夜気が身にしみる。汽かん車がびっくりするような汽笛をあげ、煙と火花をあたりに散らしながらせわしそうに動いている。私は寒さに身ぶるいしながらまだめやらない目で空を、駅のさわがしさを、ぼんやり見ていた。汽車に乗りかえて発車の時刻を待つ間ねむくでしかたがないのにねむれない。かれこれ四時頃になつた時とうとう顔を洗つて来てしまつた。いくらか目がさめた感じだ。それからだんだん眠つている人も起きはじめ六時頃にはあちらこちらで食事をとり出した。私達もお弁当を開いた。

ガッタントと大きくゆれて汽車は宇都宮の駅をすべり出したのはかれこれ六時頃であった。寝不足の目で窓外をぼんやり眺めていると近くの山にも平地にもほとんど杉の木が植えられていて濃い朝霧が木立の間を流れている。日光の町は意外なほどさびれた田舎町だった。秋の山々は紅葉に色どられて四方にそびえ、その山に囲まれた日光の町それは私の予想よりもずっとさびしい町だった。

馬返しからケープルカーに乗つた。この日は、空もうすぼんやりと雲がかかり今にも泣き出しそうだし山は深々と霧に包まれていた。だからケープルカーが上につれて雲の上に浮かぶような心細さを感じた。(以下略)

(二) 中新聞(5号 昭和24年12月9日)

学校は十一月一日から五日まで、伝染防止のため臨時休校となり、平常授業にもどつたのは十一日ごろからでした。なつかしい思い出の多い中で、この赤痢事件だけは本当に悲しいできごとなのですが、五十年の歴史の中の事実として、あえて書き記しました。改めて、短い生涯を閉じたクラスメートをしのび、当時の先生方のご心労を思う次第です。(四期 佐橋陽二)



1997年卒業アルバム



卒業アルバム

記念写真

昭和二十三年春の遠足は江ノ島で、一期生は入学以来初めてクラス別記念写真を撮った。旅行の写真はこの一枚、修学旅行でも集合写真は撮っていない。クラス別集合写真は卒業記念に校舎の前に並んだ一枚が残されているのみである。もつとも卒業アルバムは三期生の代になってやつと（印刷物として）作られたが、その後の四、五期は写真を各自購入して貼り付ける「表紙と台紙のアルバム」であった。個人のアルバムに残している小さくて少しほやけた貴重な写真的撮影者はたいてい先生である。当時写真機を持つている者は少なく、その上フィルムが大変高価であった。値段史年表（週刊朝日編）によると、プロニーサイズ十二枚撮りが二十二年七月：五一円二十銭、二十三年七月：百三十八円。ちなみに二十三年の大工の手間賃は一日当たり百二十円である。

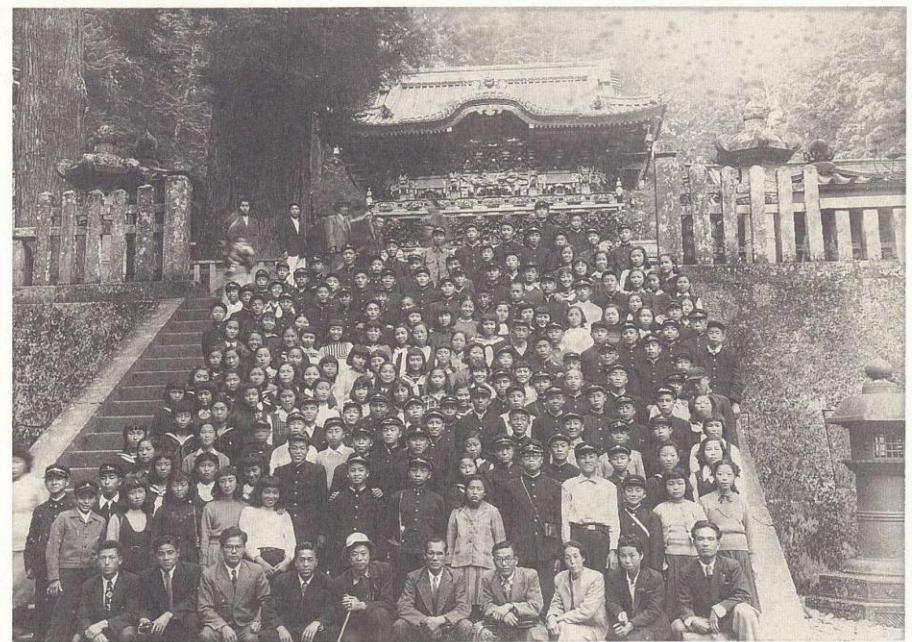
クラブ活動

創立当初から、クラブ活動は始まっていた。
【運動部】

二中創立当初の運動部系クラブのはほとんどは本当の意味でのクラブとしては確立されていない。運動に秀でた生徒を集めて、先生方の熱意で教育し練習を重ねて対外試合に臨むというものであった。運動部が入部希望者で構成されるようになるのは、数年後である。

初期の十年間に存在していた運動系クラブを挙げると野球部、陸上競技部、卓球部、籠球（バスケットボール）部、排球（バレー・ボール）部、庭球部、保健部、ソフトボール部、バドミントン部、サッカーチームとなる。

以上のうちで記録のやや残っている部についてまとめてみた。



3期生 日光修学旅行（昭和26年秋）

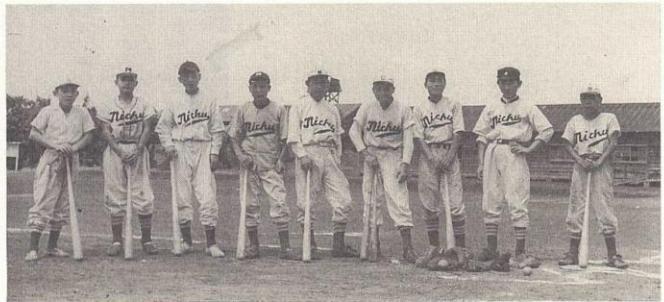


4期生 松島修学旅行（昭和27年秋）

野球部

二中野球部の発足時の記録は残っていないが、野球は最も人気のあるスポーツだった。昭和二十六年七月三十日付け二中新聞に「野球四年目を迎えて」と題する中村櫻先生の一文があるのを見ると、創立と同時に野球部の歴史は始まったと考えられる。『玉藻』創刊号によると創立直後の昭和二十二年六月五日に市内新制中学対抗野球大会があった。また、二十三年秋に校庭を共有する五中と親睦試合をしている。初期、グローブやバットは自前であった。三年の時に学校でユニフォームを揃えてくれて、それを着た嬉しさは格別のものであった、と一期生岸田弘君。その時の写真を見ると全員のユニフォームが同じではない。不揃いのユニフォームを整えるだけでも、学校側には苦労があったのではないか。練習が終わって、街灯もない真っ暗な桜土手をバットを担いでの帰り道で岸田君は三回も警官から職務質問を受けたという。戦後間もない、強盗事件が多発していた頃の話である。

昭和24年 野球部



II 昭和二十年代



真間小間借り時代

陸上競技部 当時、盛んなスポーツに陸上競技があった。その中でも二中は伝統的に中長距離に強かつたし、リレーにも好成績を挙げていた。

昭和二十三年九月 県大会市川予選会で大滝君が千五百メートルに優勝。三位、四位も二中に入った。この時四位に入った一年生の笠島君は後年早稲田大学で箱根駅伝を走ることになる。女子の岡崎さんは六十メートル、百メートルに好成績を挙げたので、大滝君とともに県大会代表となつた。

市内中学駅伝競走二十四年、市川小前、船橋陸橋間往復は二位。二十五年、市川小前、谷津遊園間往復は一時間十九分十五秒の新記録で優勝。橋田、石井、西内、板橋、笠島、栗山の六選手。

「この優勝は、十月の運動会以来毎日放課後生徒自身が自ら努力し、松戸、柴又、谷津など暗闇の中を一所懸命練習したのと、皆の応援の多かったこと、とくに女子生徒までが伴走したことなど生徒全体の協力によって初めてなし得たものと云うべきであろう。(略)」

(「二中新聞」11号 “青柳先生談” 昭和26年1月31日)

全校生から精銳を集め練習を重ねて試合に臨むのであったから、三段跳びや砲丸投げなど初めての種目をわずか二、三日の練習だけで試合に出されることもあった。中には器用に野球や庭球の選手も兼ねている生徒も何人かいた。当時、練習は裸足であったが学校にスパイクがあり試合の時だけ履かせてもらいうなこともあった。二十六年度、三中との競技会がしばしばあった。三中にはスパイクを履いた速い選手がいた。裸足の二中はコーナーでスパイクで足を踏まれたりした。五期生の頃、市内で勇名をはせた女子リレー。スタートは河西さん、アンカーは平島さんと決っていた。平島さんは優勝してやっとスパイクを買ってもらったという。

応援団一期生のときから応援団があった。競技会や運動会に華やかな応援団は欠かせないものであつた。对外試合に備え応援団も練習をした。全校一団となつての応援は選手たちを鼓舞した。

真間小の仮教室に居た昭和二十二年秋と二十三年春の市内新制中学対抗競技会の想い出である。

大会の一ヵ月くらい前になると選手としてかき集められた生徒たちは教頭の能勢先生はじめ男の先生方総出の指導のもとに練習が始まる。きつい準備体操に三日ほどは校舎東側下駄箱から通じていた階段の上がり下りの辛かったことを未だに覚えている。

(一期 竹本郁子 現小林)

卓球部 昭和二十四年、一年生の時、担任の中村宗司先生が部長をしていた卓球部にいち早く入った。真間小で野球に限界を感じていたときに家の近くの卓球場で覚えていた卓球を、中学でやつてみようと思ったのではなかつたか。二年生になったときに、入村、稻葉、野本、村山君たちが入つてき



バスケット部（昭和25年）

II 昭和二十年代



バスケット部（昭和26年）



卓球部、市内大会で四連勝（昭和28年）

たのも、その卓球場の近くに住んでいたことと無関係ではない。二十四年時（一年生）に卓球台は昇降口の奥に一台あるだけだった。放課後の練習を中村、高堀両先生をはじめ先輩諸氏とよくやっていた。とくに三年生の大山さん（故人）、二年生の加藤さんとは土曜、日曜に一日打ち合っていたことを覚えている。その頃市川市内の中学では二中が最も強かった。対外試合は隨時やっていたと思う。特に記憶に残っているのは東葛地区大会の決勝戦だったと思うが、チーム戦の三番手シングルスで相手校エースとの対戦でいい試合をして、チームメイトの皆からほめられたことである。その時の相手が服部というサウスポーだったことも忘れていない。試合には勝ったと思うがチームとしての優勝は覚えていない。

（三期 陶山安三 談）

籠球（バスケット）部 昭和二十五年に地引先生が二年生女子の中からピックアップしてバスケット部を作つて対外試合に備えた。最初はルールも知らなかつたが、千葉商大生のコーチでフェアプレーに徹するチームが出来上がつた。勇んで三中へ対外試合を行つたところ、パワー溢れる相手校の戦いぶりに圧倒され、ファールもできない上品な二中チームは惨敗であつた。敗戦の悔しさもあつたが、ルールを守つていたのに、ぶつけられたり、髪を引っ張られたりしたことの方が悔しくて三中から二中まで泣きながら帰つた。当時三中から二中との間をつなぐ一本道が人家もまばらな畑の中を続いている須和田が丘まで見通せたから、女子チームの面々も遙かな母校校舎を眼にして涙が溢れてしまつたのであつた。市の大会で二位になつたのはこの年であった翌年であったか覚えていないが、バスケットコート一面を忠靈塔のそばのソバ畑をつぶして自分たちで作つたことは覚えている。

（三期 女子）

排球（バレー）部 二十四年入学の時、先輩に誘われてバレー部に入った。活動は盛んで練習日が

週に何回かあつた。対外試合もたくさんあつた。バレー場は忠靈塔の前に一面あつた。バレー部が主催して全校のクラス対抗バレー大会をしたのは二十四年度であつた。

（三期 女子）

二十九年度 市川中学バレーボール大会 男女とも準優勝。この年の部予算二万二百円の使途はランニングパンツ七千円、ボール七千円、ネット二千円、オイル千円、大会費千円、その他二千円。

庭球部 コート造りから始まつた

平成七年四月、創部当時の庭球部顧問笈川先生のお話を聞いた。七十歳半ばと言われる先生は資料、写真ご持参で、テニス以外にもさまざまなどを四時間以上も話され収穫大であった。

先生は昭和二十四年四月、五中から赴任して来られ、旧知の在原（現佐藤）先生と再会された。師範学校時代に、関東甲信越大会で優勝した笈川先生が、新卒で赴任した小学校の近くに松戸高女があり、テニス部のコーチを頼まれた。その教え子の一人在原先生は、笈川先生のコーチで数々の大会で活躍した。“一中にテニス部を作ろうではないか”と二人は敷地内をメジャーを持って見て歩き、測定し、あの場所しかないと校長に頼み、真間口から須和田口に通じる道の南側の空地（現養護学校）にコート造りを始めた。前年九月に真間小から移転したばかり、まだ旧兵舎教室があちこちにあつた敷地内に早々とコートが出来たのは両先生の偶然の出会いがあつたからだと初めて知る。

西側の高い部分を一メートルほど削り、東側の低い部分に盛り平らにする。作業の道具類、スコップ、鍬、リヤカー、ローラー等全て、真間小校長に頼み借用。廃材で日陰の岩戸別荘側にベンチも設けた。「不正バンだらけだが正確な広さのテニスコート一面を、素人だけでよくも造りあげたものだ」と話す先生、聞く三人共々自画自賛。

授業開始前に一仕事、放課後にまた日没まで、裸足で土を掘つて運んでを繰り返す。もういいかと思うと、測定してまだまとスコップを入れる。スコップで切られた蜥蜴の尻尾が跳ねまわっていた



気象班（昭和28年）



テニスコートで（昭和24年）

こと、感触と共にさまざまと思い出すと野口さんは言う。作業したのは三年生だけではなく一年生、更に一年生も一緒だったのだろう。昭和二十四年十二月の「二中新聞」に一年女生徒が、練習日なのに他の学年がやりに来て出来ないと不満が載っていた。恐らく我が物語に使っていたのだろう。ラケット、ボール等は浅草橋で市価の半額で求めた。ラケット一本七百円を三百五十円で購入。三年後に理想的テニスコート完成。テニス部の活躍はめざましかった。目標は中学校県大会の優勝。しかし笈川先生在任中（七年間）はついに目標は達成出来ず、常に準優勝、八日市場中学校がズバ抜けて強かつた。

平成七年四月、笈川先生を囲んで、当時の部員 野口（現堀口）、高松（現森元）、竹本（現小林）

想い出

先生のアルバム一ページめにカップ・賞状を手にしたテニス部の写真。写っているのは、女は野口・高松・本多・竹本、男は伊勢・堀・石塚・宮本、一年生下の須郷・田中・金子・吉田、高山校長、笈川先生、在原先生、そして浮谷市長。笈川先生によると市長は「二中のテニスが強いと聞いて見に来られた…今では考えられない」。考えられないといえば、三年になってコートを造り、テニスに明け暮れた事だ。夏休み中の思い出は鮮明だ。休み中、女だけでコートに通つた。涼しい内に一汗流し、日中は東側校舎の3B教室で東の窓

を開け放し（下は崖）、窓にピッタリつけて積み上げた机と椅子の上で勉強、お喋り、昼寝…一方又コートに出た。近くに住む国府台高校テニス部の二人が時々コートに来た。秋の運動会の日（二十四年十月十六日）千葉県中学選手権に市川代表として男女共出場した。大事な学校行事に参加せず県大会に出た事がずっと不思議だったが、市代表だったということで五十年経てやっと納得。母親はPTAの役員として連日体育祭バザーの準備に大わらわ、子供の分まで参加していた。

（二期 竹本郁子 現小林）

【文化部】

二中創立当初の運動系クラブのほとんどが本当の意味でのクラブとしては確立されていなかったのに比べ、文化系のクラブは同好者の集う本当の意味のクラブであった。その意味で自由があつた反面

設立したり解散したりの浮き沈みもはげしかつたようだ。

初期の十年間に存在していた文化系クラブを挙げておく。文芸部、英語部、気象部、化学部、生物部、電気部、写真部、演劇部、家庭（手芸）部、園芸部、習字（書道）部、図工（図画）部、社会部、音楽部、新聞部、商業部、珠算部、華道部。

気象部 二中の気象班は、二十四年四月に発足し、代々の班員によって地道な観測を続けていた。二十五年三月「毎日中学生新聞」にとりあげられ、その実績が認められて銚子測候所管内の観測所の一つとしての役目を担うことになった。

気象班の活動と思い出

気象班は二中創立の二年後の昭和二十四年四月に発足した。

当時の記録によると、組立式風向風速計、雨量計、蒸発計、地中寒暖計を交友会費で揃え、百葉箱は大工さんを作つてもらい、熱心な三年生が忠靈塔の小高い丘に芝生を植えて竹垣を作り、百葉箱を設置した。

気象班の活動成果は、二十四年の市川理科研究会への発表を皮切りに、地元の新聞や毎日、読売などの一般紙にも報道され、二十五年には銚子測候所から区内測候所の一つに選ばれるようになった。

その後も市川市の予算で観測器材類が充実し、銚子測候所から正式な百葉箱が校庭の一隅に立てられた。このようにして気象班は、二中のシンボリックな自然科学の課外活動クラブへ成長していく。

昭和二十六年に入学した当時の気象部を指導されたいたのは、理科と数学を担当していた富樫格先生であった。立派な体格と歌舞伎俳優のような顔立ちの先生は、自然科学の面白さと楽しさを情熱をもって誇々と私達生徒に教えてくださった。気象部のイベントに夏休みのキャンプ生活があった。繁田と中川は、富樫先生と過ごした信州の松原湖畔でのキャンプ生活が特に思い出に残っている。先生の余興の浪曲情景と稻子温泉までの十キロメートルの行程を喘ぎあえぎ登つた後の温泉の心地よさ、今でも鮮明にその情景が目に浮かぶ。また当時は秋になると、きまつて大型の台風が関東地方へ上陸した。台風シーズンは我が気象部の活躍の時でもあった。本吉は貴重な観測データを銚子測候所へ送るために横なぐりの風雨の中ですぶ濡れになりながら、風速、雨量、気圧、気温等を測定したこと今



手芸部（昭和27年）



英語部

でも懐かしく思い出す。

二十八年の三年生の時、私達三名は気象部を代表して、毎年開催される市川理科研究発表会で「夏の気象」で予選をし、一位が県大会に出場できた。

二十五年には、船橋高校で予選会があり、二十六年度には他校へ行つて、英語の寸劇などをした。

六期生 コンテストの予選も本選も好成績であった。

（『玉藻』八号）

音楽部 音楽部の活動の主なものはコーラスであった。真間小学校が合唱コンクールで日本一になった時のメンバーが二中にきていたから、生徒も熱心にコンクールへ向けて練習をした。

二十四年十月八日東京九段高校で日本合唱コンクール中学生の部予選があり、二中は予選通過六校の一つに選ばれた。本選会は十一月十二日。本選会の結果についての資料はない。

（『二中新聞』7号 昭和25年5月9日）

二十八年本多先生の指導で練習をしたコーラス部が文化放送に出演し、電波に乗つて二中コーラス部の声が流れた。これがコンクールであったかどうかの詳細は不明。

図工部 図工部は二十四年南側兵舎に部室を持つた。市川市芸術展へ向けてB4ほどの水彩画か鉛筆画を制作した。桜井、内田、深山先生と指導者に恵まれた二中の作品は抜群の成績を上げていた。

二十五年度 中山競馬場で大写生会があった。二中から図工部が参加し、三年の斎藤君など二中生が入賞十名のうちの五名を占める好成績を獲得した。

生き生きしていた中学時代

二十三年の市川市芸術展に統いて、二十四年の市政十五周年記念展でも図工部は金銀銅賞を独占した。部室（兵舎）をもらった時は、いち早く天井に白墨で先生の渾名が書かれ、静物の写生ではリンゴ・ブドウなど描く前に見えない所を喰べてしまつた。学芸会の舞台背景作りでは夜遅くまで製作し、夜食と称してさつま芋を調達し、泥絵の具を溶いたり膠の付いたバケツ

で茹でて全員が喰べた。その夜は新聞紙を張り合わせた背景用の大きな紙にり巻状に包まつて眠つた。暮れには宿直室で顧問の先生と鍋物をしたり、食べ物が絡む思い出が多いが実に生き生きと過ごした。夏休みに桜井先生、内田先生、深山先生は油絵を制作された。あんな風に描きたいと憧れていた。いまだに桜井先生の展覧会には教え子が集まり交流が続いている。

（一期 渡辺一善）

二十六年度 創立五周年記念の展覧会を書道部と共催した。出品作品を募集し、展覧して、観覧者の投票により入賞作品を決めるというもので、入賞者へのささやかな賞品代はPTAが負担した。

二十九年度 三年生部員が五名と少なくて不発発。

書道部

書道部は吉岡先生という優れた指導者が部長であった。活動の記録は殆ど残っていない。

（三期 坪田 現岩本談）

二十六年度 創立五周年記念の展覧会を図工部と共に催した。

展覧会の反省

（略）書道部と図工部が主催して小さな展覧会を開くことができました。出品数は余り芳しいといえなかつたかも知れませんが、中には非常に立派な作品もあって、整理に当たる人たちを喜ばせました。今度の展覧会は生徒だけでやるという趣旨のもとに開かれたため、作品の等級も入場者に投票してもらつて得票順に決定しました。せつからく等級を決めても何か賞品を出され

ば氣抜けしたものになつてしまふので、PTA会費の一部分を割り当てていただき、賞品を出すことにしました。（略）作品を集めたり、会場を準備したり賞品を揃えたりの一つ一つが思つたよりむずかしくて結果として不足だらけになつてしまひました。もう少し用意を慎重にやればよかつたと思います。（略）

（『二中新聞』12号 昭和26年5月21日）

の研究」と題して発表を行い、成績優秀として表彰された。その表彰状は今でも大切に保管している。

（五期 繁田佳彦・中川康彦・本吉健也）

英語部 英語部の活動は活発だった。英字新聞を読んだり、リングガフォンを聞いたりと充実していた。昭和二十四年に千葉県の英語発表会が始まって、地区予選を行つた。市川と船橋は同じプロックで予選をし、一位が県大会に出場できた。

（旧教職員 寺島利雄談）